

次期総合計画・総合戦略（案）に係る 外部団体ヒアリング実施報告書

1. 実施概要

次期総合計画・総合戦略（案）の内容について、多様な分野（茶業、観光、交通、福祉・地域づくり、塩田津、移住・空き家対策）で活動する関係団体から、各現場の現状や課題認識、市との連携意向等について意見を伺った。

日時	分野	団体（所属名）
7月1日(水) 09:30～	茶業	茶業青年会
7月1日(水) 13:00～	観光	一般社団法人嬉野温泉観光協会
7月1日(水) 14:00～	交通	九州旅客鉄道株式会社（JR九州）
7月8日(水) 11:00～	福祉・地域づくり	Happy Care Life 株式会社
7月8日(水) 14:00～	塩田津 移住・空き家対策	塩田津町並み保存会 NPO 法人 D-SUPPORT

2. ヒアリングにおける主な意見・提案（分野別）

（1）茶業分野

担い手不足と農地の集約	高齢化に伴う離農が急速に進んでいる。若手生産者への農地集約を進めているものの、人手不足のため規模拡大には限界がある。大規模な茶工場でも後継者不足が深刻で、将来的に稼働を停止せざるを得なくなる懸念がある。
販路拡大・輸出目標と現場の乖離	総合戦略が掲げる「販売額の増加」や「輸出拡大」の目標に対し、個人経営の規模では品質管理と販路開拓を両立させるのは難しいのが現状。特に欧州向けは農薬基準が厳しく、海外ルートを持つ茶農家が少ないことが大きな壁になっている。
スマート農業導入の課題	市内の茶畑の多くは傾斜地にあり、障害物も多いため、ドローンや GPS を使った大型機械などのスマート農業を現場に定着させるには、技術面・地形面でのハードルが高い。
移住者・新規就農者の受け入れ	お茶に関わりたいという移住者や若者を受け入れる土壌はできてきている。ただし、単に「従業員」として雇うのではなく、自分の畑や時間を持ちながら主体的に関われる柔軟な仕組みが必要。
道路整備の要望	離農が進み、管理されなくなった茶畑から木や雑草が道路にはみ出し、運搬用トラックの通行に支障が出ている。市に、適切な整備と対応を求めたい。環境を整えることが担い手の確保にもつながってくると感じている。

(2) 観光分野

観光消費額・単価の向上	高級宿泊施設の進出が進む一方、街なかの土産品は 1,000～2,000 円程度の価格帯が中心。富裕層や高単価消費に対応できる商品開発、体験型観光プログラムの充実が必要。
観光案内と PR の強化	市街地や観光客が集まる場所に適切な案内所がなく、日帰り客が周遊時に迷っているのを見かける。温泉や湯豆腐など、既にある強みをもっと魅力的に伝える PR も必要。
関係人口の創出と移住への連動	関係人口づくりは、単に人数の拡大を追うべきではなく、地域住民と深く関わり、まちのファンになってもらうことが重要。大学と連携した「暮らし観光」やまちあるきの取組は、将来の移住にもつながる好例と感じている。
業界の女性活躍	観光・旅館業界などの主要な会議体は今も男性中心で、開催時間も含めて女性や若者が参加しにくい。子連れでの参加を認めたり、オンラインを活用したりするなど、多様な人が参画しやすい環境づくりを市が主導して進めてもいいと思う。
旅館の送迎負担とライドシェアの検討	タクシー不足を補うため各宿泊施設が個別に送迎を行っているが、人手不足の中でスタッフのコスト負担が大きく、無料でへの対応には限界がある。例えば、地元の飲食店主などが副業として参加できるライドシェアを導入するなど、解決策を考えたい。

(3) 交通分野

二次交通の不足	西九州新幹線の開業で、自家用車を使わない観光客が増えた。しかし駅と市街地・主要観光地を結ぶバスやタクシーの便数が大きく不足しており、移動手段の確保が最大の課題になっている。
新幹線駅周辺のにぎわい	観光客だけでなく市民にとっても、嬉野温泉駅周辺に「道の駅（地域の直売所機能があるもの）」や日常的に買い物ができる場所を整備してほしいという声強い。
駅周辺における二次交通の充実	観光客の周遊性向上と市内ネットワークの強化に向けて、市街地を巡回するコミュニティバスなどの導入を検討してほしい。自動運転車両の実証実験に類似する取組を今後も続けていくといいのではないだろうか。
市民の生活の足としての機能	高齢者の運転免許返納が進む中、「公共交通がないと買い物にも行けない」という切実な声が市民から上がっている。生活を支える福祉的な路線としての役割は今後ますます重要になる。
JR 九州との連携強化	ウォーキングイベントなどを通じて駅を中心に賑わいを生み出したいという意向。今後、市と連携して事業を進めたい。

(4) 福祉・地域づくり分野

高齢者が活躍する地域への転換	福祉を一つの枠組みだけで捉えるのには限界がある。高齢者を単なる「支援される側」ではなく、社会に貢献する主体としてとらえている。要介護状態になっても知識や経験を活かせるような「生きがい」の形も考えていく必要がある。
公的制度に頼らない地域づくり	介護保険制度だけに頼らない自立的な地域運営が必要になる。デイサービスの「味噌作り体験」を観光コンテンツにして収益を上げる事業や茶の実から油を抽出・販売し、その収益で道路補修や介護職員の常駐費用をまかなうような独自の地域経営を行っている。お茶や陶磁器、観光といった伝統産業での障害者の職域拡大も進めている。
e スポーツ導入について	市が進める福祉への e スポーツ導入は、従来の 100 歳体操を単に置き換えるだけ、あるいはゲームで時間を潰すだけに終わらせては意味がない。高齢者のプロゲーマー育成による収益化やオンラインでの多世代・他地域との交流など、デジタルを活かした新たな交流の形として、導入の先の目的をもつと面白い取組になると思う。
「地域の終活」という視点	中山間地域の急激な人口減少・高齢化を踏まえると、すべての地域を今のまま維持するのは現実的に難しい。行政として優先順位をつけ、地域を「見捨てる」のではなく、住民が最後までその土地で幸せに暮らせるよう地域をどう整理・縮小していくか、という「地域の終活」の視点も今後考えていかなければいけない。
地域コミュニティの課題改善	地域コミュニティ運営協議会は高齢化に伴い、役員の担い手不足が顕著である。また協議会の運営構造から「やらされ感」があるのも課題。より個性や熱意のある人を巻き込む工夫や自立していく方向への転換が必要。

(5) 移住・空き家対策／塩田津の活性化分野

職住一体のマッチングと空き家活用	デザイナーなど時間に縛られない職種の移住者と、早朝の人手不足に悩む地場産業（豆腐屋など）を、空き家活用とセットでマッチングさせる施策は有効。また、遠方から通う嬉野高校の部活生向けに空き家を「学生寮」にリノベーションし、近隣の高齢者が食事を提供する多世代交流の場として活用することもアイデアとしておもしろい。
塩田津の活性化と目標指標	以前に比べると街の雰囲気も住民の意識も良い方向に変わってきたと感じる。塩田津の来訪者数目標（現：1 万 3,000 人）は上方修正してもいいのではないかと。1 万 5,000 人は達成できると思う。今の算出方法が妥当か検証し、正確にデータを把握すべき。また、単なる通過点にしないため、滞在時間を延ばす施策も考えていかなければいけない。
資金調達と物件の有効活用	使い道を限定したガバメントクラウドファンディング（GCF）を活用し、そのストーリーに共感する地域おこし協力隊を呼び込むような、財源と人材を一体で確保する戦略が有効。さらに、保存会が中心となって歴史的景観の維持とにぎわいの創出を両立させる仕組みを検討している。
計画・戦略のあり方（数字の裏付けと広域連携）	指標を設定する際は、前年を踏襲するのではなく「人口減少による地域の減収をどう補うか、そのためにいくらの経済効果が必要か」というビジネスの視点で根拠を示す必要があると思う。また、嬉野市と鹿島市の中間地点にサテライト拠点を設けるなど、観光客の回遊性を高める広域的な「面」の展開も必要。